

概要

本稿では、19世紀初期に誕生したフランスに独自の自由主義思想の系譜の特徴を明らかにするとともに、特にトクヴィルのデモクラシー論を検討することを通じて、「近代社会」の誕生以後のリベラルが直面した〈無関心という病〉の特質を明らかにする。

従来、リベラルと言え、^{アングロ・サクソン}英米のリベラルを一般的には指し、実際、近代自由主義はジョン・ロックやアダム・スミスによって代表されてきた。しかし、その後は功利主義や合理主義に継承されたこのリベラルの系譜とは明らかに異なるもうひとつのリベラル、すなわちフランスに独自のリベラル思想の系譜が存在した。それはむしろ、近代の合理主義に反発したロマン主義の生成のなかで成立した思想であり、功利の規準では理解しえない人間の〈自由の感情〉に注目した思想の系譜であった。従来、フランス自由主義研究においてもこの点が見落とされてきたのは、ロマン主義は個人の自由や自律（理性の権利）を基礎理念とした啓蒙主義と対立すると考えられてきたからである。しかしフランスに独自の自由主義思想は、啓蒙主義とロマン主義のあいだに成立したのである。

本稿では、「啓蒙的ロマン主義」というフランス思想史の文脈で自由主義思想を芽吹かせたジェルメーヌ・スタール(Germaine Staël, 1766-1817)とバンジャマン・コンスタン(Benjamin Constant, 1767-1830)、そして次のロマン主義第2世代にそれを独自なかたちで展開させたアレクシ・ド・トクヴィル(Alexis de Tocqueville, 1805-1859)の思想を検討する。本稿は四部構成からなり、第1部では、「初期リベラル」のスタール夫人とコンスタンの思想を検討する。その特徴は自由と商業の親和性を主張し、近代的個人の自由を重視したところにあると言われてきたが、本稿では、彼女たちの独自のリベラル思想はそれと同時に、18世紀唯物論や19世紀初頭の功利主義を批判し、功利の規準ではとらえきれない人間の内面感情を重視したところがあり、さらにそれは個人の自由と人類の理性の進歩と結びつくと考えたところにあると主張する。

ところで本稿では、フランス自由主義を連続的にとらえるだけでなく、そこにはある断絶があることも指摘する。すなわち、フランス革命を青年期に迎えた初期リベラルと、革

命後に育ったトクヴィルの世代とのあいだには思想的断絶がある。初期リベラルにとって、旧社会の束縛からの解放をめざす情熱は自由や理性の進歩と結びつくと言えたが、トクヴィルの世代にとって、個人の自由や自律を脅かすような感情が増大するなかで、そう言うことはできなかった。つまり、個人の不安や憂鬱を含む情念が社会の発展や人類の進歩になかば予定調和的につながるという18世紀的世界観——スミスの言葉を借用すれば「神の見えざる手」——が解体し、「根無し草」になった人間は、市場競争のなかで政治社会に対する関心を失うどころか自発的意欲を失い、ある種の精神的麻痺状態に陥ったのである。

第Ⅱ部からⅣ部では、こうして誕生した「近代社会」の内包する矛盾を解析したトクヴィルのデモクラシー論を考察する。トクヴィルは無関心の原因である「個人主義」を心理と論理の両面から考察しているため、本稿でも第Ⅱ部で個人主義の心理から、第Ⅲ部では個人主義の論理の側面から、近代社会の〈無関心という病〉を分析していく。

第Ⅱ部では、主に『アメリカ旅行記』と『アメリカにおけるデモクラシー』をもとに、利己的個人のあいだにも自由な民主的体制が生まれる可能性を証明したアメリカ合衆国へのかれの評価を確認した後で、それを根拠にトクヴィルを功利主義者という意味で近代主義者と見なしてきた先行研究を批判的に検討する。同世代のロマン主義者と問題関心を共有していたトクヴィルは〈無関心という病〉を発見し、特にフランスを念頭においた『デモクラシー』第2巻では、実利主義の矛盾を指摘していることを論証する。

第Ⅲ部では、同時代のロマン主義の思想傾向を「汎神論」と呼んで批判したトクヴィルの議論と、かれの独自の懐疑に基づく宗教理解を考察する。あらゆる信念や信仰に関心がなくなっても生じる近代社会のある種の信仰である「汎神論」の議論は、同時代のロマン主義における〈全体の信仰〉を念頭にしていることを、かれの草稿や同時代の雑誌論考をもとに明らかにする。いくら功利的になろうと、人間はどこかに精神的権威を見出す精神的欲求をもつとトクヴィルは考えるが、社会のなかに神（精神権力）を見出す汎神論は「個人の自律」を脅かす。その汎神論に抵抗を覚えたトクヴィルの精神は、絶対的なものへの信仰とそれに納得できない理性とのあいだで鋭い緊張におかれていた。本稿ではそのパス

カル的と呼びうる実存的懷疑をかれの「精神生活」に立ち入って明らかにする。

第IV部では、無関心の広がるデモクラシーのなかで、いかに人びとが《関係性》を形成することができるのか、市民社会の精神的な動因となりうるものはなににかについて、トクヴィルにおける名誉や共感という感情に着目して考察する。どちらの感情にしても、人間の行動の主要な動機が「利己心」になる時代には、それを否定するのではなく、それを外に開くことでしか民主的な市民社会を構成することはできないことを明らかにする。

最後に、近代的個人の権利を擁護しながら近代社会の矛盾を批判し続けるトクヴィルの態度のうちに、啓蒙的合理主義の限界を見定めながら自由の可能性を探求する一つの啓蒙ないし近代性のあり方を確認すると同時に、そのなかで緊張し続けたリベラル^{ライバル}精神が辿らざるをえなかった隘路と、その可能性を描く。